

“ Except the heaven had come so near ”(F702)の分水嶺
— 形而下の喪失と形而上の喪失の両者混合 —

はじめに

エミリー・ディキンソン (Emily Dickinson, 1830-86) を一言で表わすならば抒情的短詩の女性詩人と表現できるであろう。愛や死、自然、信仰について同時代の多くの詩人が政治について表現しているにもかかわらず、それを行わず彼女自身の言葉で1700余りの珠玉の作品群を残した詩人である。彼女の感情の発露は200年後の私達の感情にも響いており、そして多くの研究者を実際に引きつけている。

彼女が声高に表現する愛のテーマとは反対とも言える喪失のテーマを扱った作品が5つほど確認できる。“ I lost a world the other day! ”(F209)、“ I never lost as much but twice ”(F39)、“ I cannot buy it—’tis not sold ”(F943)、“ Of so divine a loss ”(F1202)、“ Except the heaven had come so near ”(F702)の5つである。¹ここではこの喪失をテーマにした5つの詩を取り上げてディキンソンの喪失の感情について考察してみたいと思う。ディキンソンの作風は多くの作家と同じように固定したものではなく、変化を伴う流動的なものである。スーザン・デイバンポート・スチュアート (Susan Davenport Stewart) は、ディキンソンの音楽に対しての影響について「彼女の詩のトーンは生涯を通じて変化し、作詞家に幅広い話題と態度を表現できる歌詞を供給している」(“ The tone of her poems changed throughout her life, providing the composer with lyrics expressing a wide range of subjects and attitudes ”)(10)と述べ、ディキンソンの流動的作風を説明している。²これを踏まえるならば次に挙げる2つの批評も、彼女の内に同時に存在する2つの異なる創作に対しての態度を説明するものとして納得がいくのではないだろうか。

純精神的な詩作という行動、つまり形而上の行動と召使いの行う仕事という日常性、つまり形而下の行動を結びつけ、メアリー・カペロー (Mary Cappello) は「召使いの体が彼女に詩作のための空間を与

え、召使いの手が、彼女が寝て書く部屋の水しぶきを取り除いた」
 (“ the bodies of the servants afford space for her to make her poetry;
the hands of servant remove her slops from the room in which she
sleeps and writes ”)(57)結果、マギー・マーハー(Maggie Maher)と
いうディキンソンの召使いの影響は大きく「おそらくこの詩人をエ
ミリー・ディキンソン・マーハーと呼ぶべきである」 (“ perhaps we
should refer to the poet as Emily Dickinson Maher ”)(570)と述べて
いる。精神性と日常性の合体である。

また自然科学という形而下の事柄と詩作という精神性の形而上の
事柄の合体についてもリチャード・E・ブラントレー(Richard E.
Brantley)の述べる批評を敷衍させれば、自ずと明らかになってくる
のではないだろうか。ブラントレーは「ディキンソンは人間中心の進
化論から目をそらしていたわけではないが、詩人は進化の過程の頂
点における意識の停滞に従事し、そしておそらくそれを最も良く表
現さえしている、と強く思っていた」 (“ Dickinson, then, does not
skew evolutionary science in a human-centered direction, but she
does hold that the poet participates in, and perhaps even best
represents, the conscious stillness at the apex of evolutionary
progress ”)(146)と述べている。自然科学の現実と詩作の精神性の合
体が説明されているのである。

これら3者の批評家の意見を参考にすれば、ディキンソンの
詩作の態度の流動性、日常性や科学という形而下の事柄と詩作とい
う精神的活動の形而上の事柄の合体が明らかではないだろうか。先
に述べた喪失のテーマについて語った5つの詩について、形而下の
事柄と形而上の事柄を考察し、特にディキンソンの内面の理想的変
化を考えるならば“ Except the heaven had come so near ”(F702)と
“ Of so divine a loss ”(F1202)は連続性がある事を明らかにしてみ
たいと思う。

1. 形而下の喪失と金銭

アマストの奇女といったレツテルを持つディキンソンであり、数多くの難解な詩を残した彼女に、哲学的な意味、人生求道的な意味を与えやすいのはもちろんである。詩才を発揮するのに日常に縛られた考えでは作品は生まれず、それを超越した考えも時には必要になってくるのである。この意味でブレンダ・ワインアップル(Brenda Wineapple)の述べる「ディキンソンの詩は見えるものと聞こえるもの、感じるものを越えて、とらえられるべき意味と力を優れて有している」(“ Dickinson’s poems remarkably retain their meaning, their power to reach beyond what can be seen, heard, or felt ”)(81)という説明は彼女の詩の哲学性、形而上的性格を良く表わしているように思える。

しかし、哲学性のみが彼女の詩を説明する言葉ではない。“ I never lost as much but twice ”(F39)を考えてみよう。

I never lost as much but twice—
And that was in the sod.
Twice have I stood a beggar
Before the door of God!

Angels— twice descending
Reimburse my store—
Burglar! Banker— Father!
I am poor once more! (F39)

明らかにこの詩は自分自身の貧しさを嘆いている詩である。ディキンソンが度々言及する宗教の救いについてさえ、天使が貧しくなった自分を弁償してくれるという金との関連性を見出すことが出来るのである。ここで表現されている喪失は金の無さという世俗的な事柄である。第2連3行目の「父」(“ Father ”)は神に対しての呼びかけとも考えられるが、「私はまたしても貧しい」(“ I am poor once

more!”)状態、2度の貧しさを天使の弁償で乗り越えた後の3度目の困窮状態なのである。「神の家の入り口の前で」(“Before the door of God!”)3度目の貧しさに苦しむ自分自身が再度、天使の弁償という救いを願い、金という世俗の苦しみが精算される事を嘆願しているのである。貧しさという喪失感ここでは金で救われるはずなのである。³その事を神に関連づけているのである。

このように神の名を挙げながら、詩作においても金の無さという日常性という形而下の事を表現しているディキンソンであるが、彼女の日常への関心はアイフ・マレー(Aife Murray)の言葉においても明らかである。マレーは「生涯を通じてディキンソンは手紙や散文の断片の中で、生活の中の家事の役割について言及し、それに伴う必要悪についてしばしば苛立ちを示していた」(“Throughout her life, Dickinson commented in letters and prose fragments about housework’s role in her life, often bristling at the necessary evil it represented”)(703)と説明しているが、当然手紙や散文という著作物と同じように詩作という著作物においても彼女の日常への関心は関連づけられるはずなのである。彼女の喪失感も形而下の事柄に関連づけられても当然なのである。“I lost a world the other day”(F209)を見てみよう。

I lost a World—the other day!
Has Anybody found?
You’ll know it by the Row of Stars
Around it’s forehead bound!

A Rich man— might not notice it—
Yet— to my frugal Eye,
Of more Esteem than Ducats—
Oh find it— Sir— for me! (F209)

ここでは失った世界の大きさが「金持ちには気づかないかもしれない」(“ A Rich man— might not notice it—”)が「自分の節約家の目には/数ドカットにも優る値」(“ to my frugal Eye, / Of more Esteem than Ducats—”)というように金への換算がなされているのである。金のある人間には気づかず、貧しい自分には明らかなもの、失った世界というのは、普通の生活である。節約しているからこそ見えるものが、日常の生活であるという考えは無理な推論ではないであろう。自分のために確保したい日常の生活を最終行において神の名を出して嘆願しているのである。この詩においても喪失は金と大きくかかわっているのである。

喪失が日常という形而下に関わっている詩の最後の例として“ I cannot buy it— ’tis not sold ”(F943)を挙げてみたいと思う。

I cannot buy it— ’tis not sold—
There is no other in the World—
Mine was the only one

I was so happy I forgot
To shut the Door And it went out
And I am all alone—

If I could find it Anywhere
I would not mind the journey there
Though it took all my store

But just to look it in the Eye—
“ Did’st thou ”? “ Thou did’st not mean ”, to say,
Then, turn my Face away. (F943)

「世の中に同じものはない」(“ there is no other in the World ”)、

そして楽しみすぎて「私は忘れてしまった / 扉を閉めることを」(“ I forgot / To shut the Door ”) とは度を越した恋愛を指すと考えられるのである。この事は「私は全く一人ぼっち」(“ I am all alone— ”) という状態、そして別れの言葉の常套句とも考えられる「本心ではなかったのでしょうか」(“ Thou did'st not mean ”)等の言葉にも明らかではないだろうか。「私はそれを買えない。売ってはいないのだから」(“ I cannot buy it—'tis not sold—”)と失った恋愛について述べるのはもちろんの事ではあるが、矛盾した考えを第3連で表わしているディキンソンである。愛を見つけられるのなら、「私の全ての貯え」(“ all my store ”)を使っても構わないという金への換算がなされているのである。詩の最初で述べる売っていないのだから買えないという恋愛についての考えも、否定しているとはいえ、ある意味金への関連づけと考えられるのではないだろうか。恋愛は買うという金の行為に置き換えられているのである。恋愛という喪失が代替えできないにもかかわらず、代替え可能な購入の性格と関連づけられているとも言えるのである。

ここまで日常の喪失を良く表わしていると考えられるディキンソンの3つの詩“ I never lost as much but twice ”(F39)、“ I lost a world the other day! ”(F209)、“ I cannot buy it—'tis not sold ”(F943)を考えてきたが、これら全ての喪失が金という性格に関連づけられているのがわかるであろう。ディキンソンの喪失の日常的意味合い、形而下の意味合いは、金が重要な要素となっているのである。ディキンソンが手紙や散文の中で示した日常への関心は、詩作の中で喪失感を表わすのに、金の無さという日常的性格と関連づけられているのである。

2. 喪失と天性に対する反応

日常や常識、現実といったこの世の出来事、つまり形而下の事柄に対して精神世界、死後の世界、哲学的思考の世界を形而上の事柄と呼

ぶが、ディキンソンが好んでテーマとした死や救いは当然の事ながら後者の方、形而上の事柄に分類される事が多いであろう。この論文で取り上げている喪失を扱った詩も形而上の事柄と深い関連を示すものがある。まずはじめにたった4行の短い詩、“Of so divine a loss”(F1202)を考えてみたいと思う。

Of so divine a Loss

We enter but the Gain,

Indemnity for Loneliness

That such a Bliss has been. (F1202)

詩の1行目に「喪失」(“a Loss”)という単語が使われているように、この詩の扱うテーマは存在を消す事、つまり死についての考察である。しかし反面2行目に「獲得」(“the Gain”)という単語が使われているように、相反する考え方が並置されている。「とても神聖な喪失とは/私達が獲得の中へと入ることだけ」(“Of so divine a Loss / We enter but the Gain”)とは自分自身のこの世の存在、肉体が消えた後に、天に召された事で満たされた状態の「獲得」を経験する事を言っているのである。

3行目で使われている「孤独」(“Loneliness”)という単語があるが、ディキンソンは孤独について特別な意識を持っていたようである。死と孤独の関連性を述べているエレノア・ルイス・ランバート(Eleanore Lewis Lambert)は、「ディキンソンにとって死とは人との接触の欠如である。誰からも見えないし、聞こえないという事なのだ」(“For Dickinson, death is the absence of personal contact. It means not seeing or hearing from someone”)(10)と述べているが、人との接触の欠如はまさに孤独の状態とっていいだろう。孤独がディキンソンにとって望ましくないというのは明らかである。なぜなら死によって埋め合わせが行われ、「賠償」(“Indemnity”)されるものだからである。賠償とは損失に対する充当であり、賠償とは当然、

損失に近いマイナスの性格を持つものである。孤独の楽しみという言葉も確かにあるが、ディキンソンのこの詩における孤独とは、マイナスの性格を持っているのは明らかである。

ランバートが言うように人との接触の欠如という死についての考えを持つディキンソンは、結果的にこの孤独を経験した後、「至福」(“ a Bliss ”)という状態に至る事を最終行で述べている。「神聖な喪失」(“ so divine a Loss ”)と1行目に述べる、人の力の及ばない天性が、自分を喜びへ導くという形而上の力を信じるディキンソンの姿がこの詩で明らかではないだろうか。この詩における喪失は自己の存在がこの世から消える事で獲得される至福と結びついているのである。第1節で述べた形而下についての喪失、金についての考えとは明らかな違いを示しているのである。第1節で述べた喪失は全て金に関連づけが可能である事は既に述べたが、貧しさであれ失った恋愛であれ、喪失すなわち悲しみとなっているのである。この詩のように自己の存在の喪失が喜びへと繋がっている事とは明らかな対比を示しているのがわかるであろう。

では同じように天性という人の力の及ばないものをうたった“ Except the heaven had come so near ”(F702)を考察してみたいと思う。

Except the Heaven had come so near—
So seemed to choose My Door—
The Distance would not haunt me so—
I had not hoped— before—

But just to hear the Grace depart—
I never thought to see—
Afflicts me with a Double loss—
'Tis lost— And lost to me— (F702)

「天がこれほど近くにやってきた」(“the Heaven had come so near”)とは、「以前は望んでいなかった」(“I had not hoped—before—”)という死を意識し始めた事を指しているが、この詩においては死に伴う恐怖が描かれていると言えるであろう。自己の存在の喪失は恐怖となっているのである。「恵みが去って行くのを聞く」(“to hear the Grace depart—”)という死について、ディキンソンは苦しみを表現している。死に対して普通の人間が抱く感情をディキンソンも持っているのである。「死を閉め出したとしても、苦しんでいる意識という牢獄から逃げ出すことは単純ではない」(“Barring death, there is simply no escape from the prison of an afflicted consciousness”)(Archer 259)事を詩の中で表現しているディキンソンである。「自分の扉」(“My Door”)を天が選ぶという運命に言及しているディキンソンであるが、⁴自身の力を越えたところにある天性を強く意識していると言える。天性による自己の喪失は、先に述べた“Of so divine a loss”(F1202)と違い苦しきとなっているのである。死に対しての正反対の意識が2つの詩から明らかになるのではないだろうか。

形而上の喪失に対する考えを扱った詩を2つ取り上げてみたが、死に対する喜びであれ、恐怖であれ、喪失は天性に対する反応である。喪失が金という日常の事柄に関連づけられた第1節の3つの詩とは違いが見られるであろう。天性に対する心の反応、死に対する喜びと恐怖という2つの感情が喪失と結びついているのである。喪失が金という実体を持った物に結びつけられた第1節の3つの詩とは違い、あくまで目に見えない精神の動きを特徴とした詩となっているのである。第1節で取り上げた3つの詩とここで取り上げた2つの詩の違いが明らかになったのではないだろうか。同じ喪失のテーマでも違った性格を持つ、形而下を扱った詩と形而上を扱った詩なのである。

第1節で扱った3つの喪失の詩、“ I lost a world the other day! ”(F209)、“ I never lost as much but twice ”(F39)、“ I cannot buy it—’tis not sold ”(F943)は全て金という現実の問題に関係していた。そして第2節で扱った2つの詩“ Except the heaven had come so near ”(F702)、“ Of so divine a loss ”(F1202)は恐怖であれ、喜びであれ、天性に対する反応として、物という目に見える物質に内容が関連させられているものではなかった。第1節の喪失の詩が形而下の特徴、第2節の喪失の詩が形而上の特徴である、というのをここまですべて明らかにしたはずである。

ディキンソンがこれらの喪失を表わす詩に対して神という言葉を度々使っている事が明らかである。彼女の信仰心と詩作の関連性は誰の目にも明らかであるが、信仰心が喪失や死と深い関連性を持っているのは、ここで一言述べてもいいことであろう。アン・ウエスト・ラミRez (Anne West Ramirez)の言葉をここで引用してみたいと思う。

Throughout her life’s work, nonetheless, Dickinson leaves little doubt that human being may be agents of God’s grace, whether they be publicly ordained priests, privately called prophets, or any other persons who know the meaning of love. (396)

ラミRezのこの言葉はディキンソンが到達した信仰心の極みを説明したものであり、「神の恩恵の代行者」(“ agents of God’s grace ”)としての人間であるならば、死の恐怖は乗り越えられているはずである。生涯にわたってほとんど疑う事のない信念であったとラミRezは述べているが、実際、ディキンソンは死に対して恐怖を覚えている時もあるのである。それが苦しみという言葉を使って死の恐怖を表わしている“ Except the heaven had come so near “(F702)である。

この論文の目的は“ Except the heaven had come so near ”(F702)と“ Of so divine a loss ”(F1202)の関連性を明らかにして、両者の連

続性を説明する事であった。“ Except the heaven had come so near ” (F702)の詩の最後の行(“ ’Tis lost— And lost to me—”)は「そのものの喪失と私にとっての喪失」と訳され、「二重の喪失」(“ Double loss ”)であるが、これは直接の喪失と間接の喪失とに置き換えられるものである。直接の喪失が物質の喪失、「私にとっての喪失」とは死に対して感じる恐怖という目に見えないものへの反応である事は明らかではないだろうか。第1節で扱った3つの喪失の詩が金という物質に関連づけられる事は再三述べてきたが、ここで述べる「そのものの喪失」という直接の喪失と、物質である金の関連付けは行いやすいものである。直接の喪失とは形而下の事柄の喪失なのである。ディキンソンはこの直接の喪失に金を関連づけしているのである。

“ Of so divine a loss ”(F1202)が死を喜びとしている点、また肉体の喪失が「獲得」(“ the Gain ”)としている点で“ Except the heaven had come so near ”(F702)の死に対する恐怖と明らかな対比を示しているが、信仰心にとって死の恐怖を乗り越えて喜びを感じるようになるというのは、理想的な精神の流れである、というのは明らかであろう。“ Except the heaven had come so near ”(F702)の中で直接の喪失という形而下の喪失と間接の喪失という形而上の喪失を表現している事は、この詩が死を喜びとする“ Of so divine a loss ”(F1202)の詩に至るまでの分水嶺となっていることを表わしているのである。この両者の詩の連続性は明らかではないだろうか。⁵これが、本稿の問に対する答えである。

死という避けられない現実に対して人が恐怖し、そして反対に喜びを見出そうとするのは、ある意味当然の事なのかもしれない。常に一定の考えを持ち続ける事は、誰にとっても至難の事ではあるが、ディキンソンもまた然りである。この死についての流動的思考が我々の感情に近いものであり。19世紀の詩人、偉大な詩人であるディキンソンといえども。現代の我々に何らかの関連性を投げかけ、そして魅力を発しているのであろう。

註

1. 以下、エミリー・ディキンソンの詩の引用は、フランクリン版に拠るものとする。
2. 音楽における省略や繰り返しの特徴を考えるならば、ダッシュを使い省略を行うディキンソンの詩は、その意味でも相性がいいだろう。また短い詩が多い彼女の詩は、そのまま音楽におけるリフレインとして使用する事も可能なはずである。内容面のみならず、形式面でも音楽家たちにとって有用な素材を提供しているディキンソンである。
3. ここでディキンソンは、金を必要な物として表現しているが、聖書において金は時に繁栄や富という肯定的な意味ではなく、墮落を意味する場合がある。例えば、「マタイによる福音書」6章24節では、「誰も二人の主人に仕える事は出来ない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、のどちらかである。あなた方は神と富とに仕える事は出来ない」(“ No one can serve two masters; for either he will hate the one and love the other, or else he will be loyal to the one and despise the other. You cannot serve God and mammon ”)(Matthew 6:24)という表現がある。
4. 扉に精神的な境界の意味を与える事がしばしばあるが、この詩においても、現世と来世を分ける境界の意味を与える事も出来るであろう。エミリー・ブロンテ(Emily Brontë)の『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)にも扉と同じような意味で、窓が現世と来世を分ける象徴的な意味を表わしている場面がある。
5. ここで述べる連続性とは創作年代の順番ではなく、作品の意味を考える内容的な連続性である。筆者はそれぞれの詩について特に創作年代は考慮していないが、筆者が述べる2つの詩の連続性について、創作年代が逆になっている事も十分にありうる、という事をここで一言述べておく。

引用 · 参考文献

- Archer, Seth. " "I Had a Terror": Emily Dickinson's Demon. " *Southwest Review*, Vol. 94, No. 2 (2009), <https://www.jstor.org/stable/43472987> pp. 255-73.
- Bennett, Paula Bernat. " "The Negro never knew": Emily Dickinson and Racial Typology in the Nineteenth Century. " *Legacy*, Vol. 19, No. 1 (2002), <https://www.jstor.org/stable/25679413>, pp. 53-61.
- Brantley, Richard E. . " The Empirical Imagination of Emily Dickinson. " *The Wordsworth Circle*, Vol. 32, No. 3, PART ONE: TRANSATLANTIC ROMANTICISM: A selection of papers presented at the Wordsworth-Coleridge Association Meeting, 2000 (Summer, 2001), <https://www.jstor.org/stable/24044781>, pp. 144-48.
- Cappello, Mary. " Dickinson's Facing or Turning Away. " *Southwest Review*, Vol. 90, No. 4 (2005), <https://www.jstor.org/stable/43472482>, pp. 567-84.
- Dean, Gabrielle. " Emily Dickinson's "Poetry of the Portfolio". " *Text*, Vol. 14 (2002), <https://www.jstor.org/stable/30227999>, pp. 241-76.
- Dickinson, Emily. *The Poems of Emily Dickinson*. Ed. R. W. Franklin, The Belknap Press of Harvard University Press, 1998.
- Lambert, Eleanore Lewis. " Emily Dickinson's Joke about Death. " *Studies in American Humor*, New Series 3, No. 27 (2013), <https://www.jstor.org/stable/23823978>, pp. 7-32.
- McNair, Wesley. " Discovering Emily Dickinson. " *The Sewanee Review*, Vol. 108, No. 1 (Winter, 2000),

<https://www.jstor.org/stable/27548799>, pp. 117-23.

Murray, Aífe. "Miss Margaret's Emily Dickinson." *Signs*, Vol. 24, No. 3 (Spring, 1999),

<https://www.jstor.org/stable/3175323>, pp. 697-732.

Nelson, Thomas. *Holy Bible : New King James Version*, 1982.

Pavlish, Catherine. "Becoming Emily." *Feminist Studies*, Vol. 35, No. 2 (Summer 2009),

<https://www.jstor.org/stable/40607967>, pp. 274-93.

Rmirez, Anne West. "Emily Dickinson's Vocation as Female Prophet." *Christianity and Literature*, Vol. 47, No. 4

(Summer 1998), <https://www.jstor.org/stable/44314135>, pp. 387-401.

Stewart, Susan Davenport and Susan Davenport Smith. "The Song in Emily Dickinson's Poems AND A REVIEW OF SELECTED CHORAL SETTINGS OF HER POETRY." *The Choral Journal*, Vol. 47, No. 3 (SEPTEMBER 2006),

<https://www.jstor.org/stable/23554800>, pp. 8-20.

Wineapple, Brenda. "Emily Dickinson's First Book." *New England Review* (1990-), Vol. 29, No. 3 (2008),

<https://www.jstor.org/stable/40245130>, pp. 72-84.